

2025年12月19日

KingGnuにおける常田大希の音楽表現について

小笠原 勉

第1章 研究背景

本研究は、ロックバンド King Gnu における音楽表現を、中心人物である常田大希の音楽観および制作姿勢から分析することを目的とする。研究動機の背景には、自身のバンド活動の経験がある。楽曲制作やライブを行う中で、音楽は単なる音の集合や娯楽ではなく、作り手の価値観や考え方、さらには社会や時代に対する姿勢までも反映される表現行為であると感じるようになった。演奏技術やアレンジの巧みさだけでなく、曲の構造やメロディ、歌詞の内容までが作り手の思想や感情と密接に結びついており、音楽を聴くことは同時にその人の価値観に触れる行為であると考える。こうした観点から、音楽に関心を持つきっかけとなった King Gnu というバンドのリーダー常田大希について、音楽表現の特徴や制作姿勢を分析することとした。

第2章 常田大希の概要

常田大希は、King Gnu のリーダーとして、作曲・編曲・プロデュースを中心に担う人物である。1992年に東京都で生まれ、幼少期からピアノに親しむなど音楽環境の中で育った。小学生の頃から音楽に関心を持ち、ピアノだけでなくギター・ドラムなどさまざまな楽器にも触れることで、自らの音楽的表現の幅を広げていった。中学・高校時代には、クラシック音楽の学習に加え、ロックやジャズ、ヒップホップなど幅広いジャンルの音楽にも興味を持ち、ジャンルを越えた音楽体験を積むことで、後の独自の音楽性の基礎を築いた。

高校卒業後、東京藝術大学に進学し、チェロ専攻を通してクラシック音楽の理論や考え方を深く学んだ。この経験は、複雑な楽曲構造や多層的な編曲を可能にする基盤となっている一方で、常田はクラシック音楽の美しさに留まらず、意図的に「歪み」や「粗さ」を楽曲に取り入れることで、より人間味や感情を感じさせる表現を追求している。また、大学時代には、理論的な技術を身につけるだけでなく、自らの音楽を現代社会の感覚に落とし込む方法を模索しており、後に King Gnu や彼が結成した別プロジェクト、millennium parade における創作姿勢に反映されることとなった。

クラシックに限らず、常田はヒップホップやブラックミュージック、さらには現代美術や映像表現など多方面に強い関心を持ち、これらの要素を積極的に取り入れている。このため、彼の音楽にはジャンルを超えた自由な発想が感じられる。理論に基づいた構造性と、感情表現や違和感が共存する独特のサウンドは、常田の多面的な音楽観の表れである。

常田自身の音楽制作に対する考え方を言葉として残っている。『SWITCH Vol.39 No.2 特集 常田大希 破壊と創造』において、常田は「一度完成したと思った形を壊さないと、新し

い表現は生まれない」と述べており（スイッチパブリッシング, 2021,p.18）、固定化した既存の形式に依存せず、常に表現を更新する姿勢を示している。また、NHK のインタビューでは「大人とは、自分の正解を持つことを大事にすることだ」と語っており（NHK, 2021）、他者の評価や社会的な基準よりも、自身の判断や直感を重視する姿勢がうかがえる。これらの発言から、常田の音楽活動は一貫した思想に基づいて行われており、適当な創作ではなく、明確な理念のもとに構築されていることが分かる。

さらに、常田は音楽制作を個人の作業として完結させるのではなく、共同作業として捉えているという点も特徴的である。King Gnu ではメンバーとのやり取りを重視し、互いの演奏やアイデアを反映させることで、個人の感性が集団としての音楽表現に昇華される仕組みを作り上げている。また、映像作家やアートディレクターとの協力を通じて、音楽だけでなく映像や世界観全体を統合した総合的な表現を生み出している。これは、単なる楽曲制作に留まらず、視覚や感覚を含めた体験全体をデザインするという考え方に基づくものであり、King Gnu の楽曲が聴覚だけでなく、視覚的にも強い印象を与える理由の一つとなっている。

このように、常田大希は理論的な音楽的基盤と幅広い音楽を持ち合わせ、個人の感性を集団や映像表現と組み合わせることで、独自の音楽世界を形成している人物である。King Gnu や millennium parade における彼の活動は、単に音楽的才能だけでなく、ジャンルや形式の枠にとらわれないものであり、現代の音楽シーンにおいて存在感を放っている。

第3章 KingGnu の概要と研究目的

King Gnu は 2010 年代後半以降、日本の音楽シーンにおいて急速に存在感を高めてきたバンドである。テレビドラマや映画の主題歌として楽曲が広く知られる一方で、ジャンルにとらわれない音楽性という特徴を持っている。ロックバンドという形式を取りながらも、クラシック、電子音楽、ヒップホップ、ジャズ、ノイズなど、異なる音楽要素が一つの楽曲の中で共存している点が特徴的である。これらの要素は一見異質に感じられるが、楽曲全体のアレンジや演奏、ミックスの工夫によって統合され、違和感なく聞くことができる。この統合力が King Gnu の音楽が支持されている理由の一つであり、音楽表現の複雑性を理解するための重要なポイントである。

しかし、King Gnu の音楽や常田大希の表現は、一般的には「感覚的」「直感的」「センスが良い」といった言葉で語られることがあり、その内側にある制作の論理や思想が十分に言語化されてきたとは言い難い。そのため、本研究では、常田大希のインタビューでの発言や、King Gnu および別プロジェクトである millennium parade の楽曲や映像作品を分析対象とし、直感的に理解されがちな音楽表現を、できるだけ客観的な言葉で説明することを試みる。

また、楽曲制作や映像表現における構造的特徴、ジャンル融合の具体例、チームとしての制作プロセスなど、多角的な観点から検討することで、常田大希の音楽観がどのように作品に反映されているのかを明らかにすることを目的とする。

第4章 常田大希の音楽観 インタビューと言説から読み解く制作姿勢

本章では、常田大希の音楽観について、雑誌インタビューなどで確認できる発言をもとに整理し、King Gnu および別プロジェクトである millennium parade にどのように反映されているのかを考察する。ここでは、常田本人の言葉と作品の具体的特徴を対応させながら論じることを目的とする。

常田の音楽観を考えるうえで、まず注目すべき点は、完成や正解に対する考え方である。『SWITCH Vol.39 No.2 特集 常田大希 破壊と創造』において、常田は「一度完成したと思った形をそのまま続けても、新しい表現は生まれない」と述べている（スイッチパブリッシング、2021,p.19）。この発言は、常田が成功した形式や既存の型に依存することを避け、常に表現を更新し続けようとしている姿勢を示している。

また同書において、常田は自身が東京藝術大学でクラシック音楽を学んだ経験について言及し、「音楽を構造として捉える感覚が身についた」と語っている（スイッチパブリッシング、2021,p.22）。この発言から、クラシック音楽教育を通じて養われた理論的な思考や構成意識が、現在の楽曲制作の基盤の一つになっていると考えられる。一方で常田は、クラシック音楽だけに基づいた表現について「きれいにまとまりすぎてしまう」とも述べており（同書）、整った構造の中にあえて粗さや歪みを取り入れることを重視している。

このような考え方には、King Gnu の楽曲に見られる特徴と対応している。たとえば、多くの楽曲では複雑なコード進行や構成が用いられている一方で、音色には歪みやノイズが含まれており、必ずしも「整った音」だけで構成されているわけではない。この点について、理論的に作られた楽曲の構造と、感情を感じさせる音の要素が同時に存在していることが、常田の音楽観を特徴づけていると考える。

さらに、常田は音楽制作を個人の作業として完結させるのではなく、集団的な営みとして捉えている。『SWITCH』のインタビューでは、「音楽は一人で作るものではなく、メンバーとのやり取りの中で変化していくものだ」と語っている（スイッチパブリッシング、2021,p.27）。この発言は、常田が作曲やプロデュースの中心にいながらも、King Gnu を「個人の表現」ではなく「バンドの表現」として位置づけていることを示している。

一方で、常田の音楽観がより直接的な形で表れているのが、別プロジェクトである millennium parade である。常田はこのプロジェクトについて、「King Gnu が現実の自分たちだとしたら、millennium parade は頭の中にあるイメージをそのまま外に出す場所だ」と説明している（スイッチパブリッシング、2021,p.30）。この発言から、millennium parade が、大衆との共有を前提とする King Gnu とは異なり、より実験的で個人的な表現の場として位置づけられていることが分かる。

millennium parade の作品では、音楽と映像がより強く同時に構想されている点が特徴的である。楽曲は単体で意味を完結させるというよりも、映像表現と組み合わさることで全体のイメージが立ち上がる構造になっている。この制作姿勢について、常田は「音楽だけでなく、世界観ごと提示する必要がある」と述べており（同書）、音楽を総合的な表現として捉

えていることが確認できる。

以上の言説と作品分析から、常田大希の音楽観は、「完成した形を疑い続ける姿勢」「理論的構造と感情の共存」「個人と集団、実験性と共有性を使い分ける視点」によって特徴づけられると考えられる。King Gnu と millennium parade という二つのプロジェクトは、この音楽観を異なる条件のもとで表現するための場であり、常田の音楽表現を多角的に理解する手がかりとなっている

第5章 楽曲・ミュージックビデオ分析 King Gnu における表現の具体像

本章では、King Gnu の代表曲である「白日」(2019年) および「逆夢」(2021年) を中心に、楽曲構成や歌詞、ミュージックビデオの表現を分析し、前章で整理した常田大希の音楽観がどのように具体的な作品として表れているのかを考察する。ここでは、楽曲を感覚的に評価するのではなく、音楽的特徴や映像表現に着目することで、その表現の仕組みを言葉で説明することを目的とする。

まず「白日」は、King Gnu の知名度を大きく高めた楽曲であり、多くのリスナーに強い印象を残した作品である。楽曲全体はバラード調でありながら、単純な音色だけで構成されているわけではない。音色やボーカルの表現には激しいギターソロや高い裏声などを通じて広がりや強さが感じられ、音楽的な高揚感が生まれていると考えられる。また、音楽的には、「白日」は複数の転調や複雑なコード進行が用いられているものの、全体として違和感なく聴くことができる点から、楽曲の構成が事前に整理された上で作られていると考えられる楽曲である。これらの点は、第2章で述べた「構造と感情の共存」という常田の音楽観と対応している。

また、「白日」のミュージックビデオはモノクロ映像を基調としており、光と影が強調されている。登場人物はモノクロを通して過去の空間にいるように描かれ、明確な物語が語られるわけではないが、喪失感や行き場のなさといった感覚が視覚的に表現されている。このように、音楽と映像が同じ方向性の感情を補強し合っている点から、King Gnu の作品が音楽単体ではなく、総合的な表現として構想されていることが分かる。

次に「逆夢」は、映画『呪術廻戦 0』の主題歌として制作された楽曲であり、「白日」とは異なるアプローチが見られる作品である。「逆夢」というタイトルが示す通り、この楽曲では夢と現実、生と死といった対立する概念が重なり合うように描かれている。

音楽面では、「逆夢」はヴァイオリンやヴィオラを前面に出した壮大なアレンジが特徴的であり、常田がクラシック音楽で養った感覚や編曲力が強く表れている。一方で、リズムや音色には打ち込みや音の加工が使われており、クラシック音楽のような音楽表現とは異なっている。生の演奏だけでなく電子的な音が取り入れられていることから、クラシック音楽をそのまま再現しているのではなく、現代的な感覚で作られている楽曲だと考えられる。このような点から、「逆夢」はクラシック的要素と現代的な感覚を融合させた楽曲であるといえる。

ミュージックビデオにおいても、「逆夢」は現実と非現実が混ざり合うような映像表現が用いられている。人物は現実的でありながら、光の使い方、現実には存在しないような空間を再現することによって幻想的な印象が与えられており、楽曲の持つ夢を見ているような曖昧な世界観と対応している。このように、映像が楽曲の意味を一方向に限定するのではなく、解釈の幅を広げる役割を果たしている点が特徴的である。

以上の分析から、King Gnu の楽曲は、単に感情を伝えるための音楽ではなく、構造、歌詞、映像を含めた複数の要素が重なり合うことで成立している表現であるといえる。常田大希の音楽観は、これらの要素を統合しながらも、聴き手に一つの答えを押しつけない形で作品を提示する点に表れていると考えられる。

第6章 millennium paradeとの比較から見る常田大希の音楽観

本章では、常田大希が主宰する別プロジェクトである millennium parade（以下、ミレニアムパレード）と King Gnu を比較することで、常田の音楽観がどのように使い分けられているのかを考察する。両者は同一人物によって率いられているにもかかわらず、音楽性や表現の方向性には明確な違いが見られる。この違いを整理することで、常田の音楽表現の特徴をより具体的に捉えることができると考えられる。

まず、ミレニアムパレードは King Gnu に比べて、より実験性の高い表現を特徴としている。例えば「Fly with me」では、はっきりとした物語や感情の説明が提示されるというよりも、断片的な言葉や映像、複雑に重なり合う音が連続する構成となっている。リズムも聞きやすいものではなく、展開が頻繁に切り替わるため、聴き手にとっては分かりやすさよりも「違和感」や「不安定さ」が前面に出てくる楽曲である。

ミュージックビデオにおいても、アニメーションと CG が混在し、現実と仮想の境界が曖昧に描かれている。このような表現は、現代社会におけるテクノロジーや情報環境の複雑さを反映しているように感じられる。King Gnu の MV が比較的感覚や物語を共有しやすい映像構成を取っているのに対し、ミレニアムパレードでは、意味が一つに定まらない映像表現が意識的に選ばれていると考えられる。

常田自身は『SWITCH Vol.39 No.2』のインタビューにおいて、ミレニアムパレードについて「頭の中にあるものをそのまま外に出している」と語っている（スイッチパブリッシング、2021,p.32）。この発言から、ミレニアムパレードは「聴き手に伝わること」よりも、「自身の思考や感覚を形にすること」を優先したプロジェクトであると読み取ることができる。一方、King Gnu については、ポップスとして多くの人に届く形を意識して制作されていることが、楽曲や歌詞からも分かる。

音楽的な側面を比較すると、King Gnu ではメロディやサビの存在が重視され、感情の起伏が比較的分かりやすく設計されている。それに対してミレニアムパレードでは、メロディより音楽を中心にしつつ映像、アートが重視されており、必ずしも「歌」としての分かりやすさを目的としていない。この違いから、常田はプロジェクトごとに「どこまで聴き手に委

ねるか」を意識的に調整していると考えられる

しかし、両者に共通している点も存在する。それは、音楽を個人の表現にとどめず、複数による共同作業として捉えている点である。ミレニアムパレードは音楽家だけでなく、映像作家やアーティストを含む集団として構成されており、King Gnu におけるバンドという形とは異なるものの、「チームで作品を作る」という姿勢は共通している。この点から、常田の音楽観には一貫して「個人の感性を、他者との関係の中で形にする」という考え方があると考えられる。

以上の比較から、King Gnu とミレニアムパレードは対立する存在ではなく、常田大希の音楽観を異なる方向から表現する二つの側面であるといえる。King Gnu が「多くの人に届く音楽」を通して向き合うプロジェクトであるのに対し、ミレニアムパレードは「内面や思考の複雑さ」をそのまま提示する場である。この二つを行き来することで、常田は自身の音楽表現を一方向に固定せず、常に更新し続けているのではないかと考えられる。

第7章 結論 — King Gnu における常田大希の音楽表現の本質

本研究では、King Gnu の音楽表現を、中心人物である常田大希の音楽観および制作姿勢に着目して分析してきた。第3章では研究背景を整理し、第4章では常田の言説をもとに音楽観の特徴を明らかにした。第5章では具体的な楽曲分析を通してその音楽観がどのように作品に反映されているかを検討し、第6章では millennium parade との比較から、プロジェクトごとの表現の違いと共通点を考察した。本章では、これらの分析を総合し、King Gnu における常田大希の音楽表現の本質について、より具体的な側面を含めて論じる。

分析の結果、常田大希の音楽表現の本質は以下の三つにまとめられる。

一つは、構造と感情の共存である。常田はクラシック音楽の知識を基盤に、楽曲全体の構成や展開を緻密に設計する一方で、理論に影響されすぎることを避けるため、意図的に歪みや雑さ、感情の揺れを残すような音作りを行っている。この特徴は「白日」や「逆夢」において顕著である。「白日」では複雑なコード進行や転調が用いられているが、ボーカルの微妙な抑揚やギターの歪み、裏声の使用などによって、楽曲から感情的な高揚感を感じることができる。また、「逆夢」ではクラシック的なヴァイオリンやヴィオラの編曲に加え、打ち込みや音の加工が施されることで、理論的に整った構造の中に現代的な音楽性が混在している。これにより、常田の音楽は単なるポップスやクラシック作品にとどまらず、複雑で奥行きのある表現として成立している。

二つ目は、音楽表現を個人の内面だけに留めず、共同作業として形にする姿勢である。King Gnu ではバンドメンバーそれぞれの演奏や個性が楽曲に反映されているだけでなく、映像作家やアートディレクターなどの様々な専門家との協力により、音楽と視覚表現が一体となった総合芸術として表現されている。たとえば、「白日」のミュージックビデオでは、モノクロ映像を基調に光と影のコントラストを強調し、登場人物の感情や時間の経過を音楽と同期させて表現している。このように、音楽制作は単なる個人的作業ではなく、複数の人

間や表現手段を統合して一つの世界観を作り上げる営みであることが、常田の音楽観の重要な特徴である。

三つ目は、プロジェクトごとの表現の柔軟な使い分けである。King Gnu は「多くの人に届く音楽」を意識した表現である一方、millennium parade では常田自身の思考や感覚をより直接的に形にする場だと考えられた。この二つのプロジェクトを使い分けることで、常田は「大衆性」と「実験性」、「共有」と「内面」といった相反する要素を両立させている。ミレニアムパレードの楽曲「Fly with me」では、断片的な言葉や映像、複雑なリズムが連続し、聴き手には分かりやすさよりも不安定さや違和感を覚えさせる楽曲となっている。映像面でもアニメーションと CG を組み合わせ、独特な表現を描くことで、従来の音楽表現では得られない実験的な体験を生み出している。このような両プロジェクトの差異は、常田が表現の目的や対象を意識的に切り替えつつも、核心にある音楽観をぶらさずに適用していることを示している。

また、今後の課題としては、分析対象となった楽曲やインタビューが限定的である点や、音楽理論的な詳細分析が十分に行えていない点が挙げられる。特にリズムパターン、メロディの動きなどの詳細分析を加えることで、常田の音楽表現の構造的理解がさらに深まると考えられる。また、他の現代音楽アーティストとの比較研究や、ライブパフォーマンスにおける音楽と映像の相互作用の分析も、常田の音楽観をより多角的に把握するうえで有効である。

以上より、King Gnu における常田大希の音楽表現の本質は、「構造と感情の共存」「共同作業としての総合表現」「プロジェクトごとの表現の柔軟な使い分け」によって特徴づけられ、これらの要素を通して、彼の音楽は単なるポップスやエンターテインメントにとどまらず、現代音楽表現の一つの方向性を提示していると結論づけられる。

【参考文献】

- (1)スイッチパブリッシング (2021) .『SWITCH Vol.39 No.2 特集 常田大希 破壊と創造』,pp.18-32.
- (2)NHK (2021) 「King Gnu 常田大希さんが語る大人とは『自分の正解を持つことを大事に』」
https://www3.nhk.or.jp/news/special/adult-age-reduction/featured-articles/detail/detail_16.html (参照 2025 11-05)
- (3)King Gnu 公式サイト <https://kinggnu.jp/> (参照 2025 11-05)